

「世界の潮流と近代日本テニス～来日選手たちに学んだこと～」年譜
1912(明治45/大正元)年～1954(昭和29)年

年	元号	来日選手の動向など (時代背景)	日本選手の動向など
1912	明治45	2月、フィリピン・マニラのカーニバル祭期間中に行われた東洋テニス選手権(the Championship of the Orient)からの帰途、優勝した米国のG・ガードナー(米国9位)が来日し、東京ローンテニス倶楽部(永田町)でエキシビジョンマッチを行った	東京ローンテニス倶楽部の朝吹常吉、山崎健之丞らが参加(テニス選手初の海外遠征)。軟球時代だった慶応義塾庭球部の熊谷一彌らもエキシビジョンマッチを見学した
1913	大正2	12月、マニラの東洋選手権に出場途次、米国のビル・ジョンソン(米国4位)とE・フットレルが横浜に寄り、バンド倶楽部で、レギュレーションボール(硬球)を採用したばかりの熊谷/野村組とエキシビジョンマッチを行った(3月、国際テニス連盟が発足した)	年を越えた1914年1月、慶応庭球部の熊谷、野村祐一、市川重二、三萬進もマニラの東洋選手権に出場。熊谷は、準決勝でフットレルに2-3で敗れる。野村と組んだ様でもジョンソン/フットレル組に屈して2位になったが、とくにジョンソンのスタイルに学ぶことが多かった
1916	大正5	2月、マニラの東洋選手権大会からの帰途、米国のC・グリフィン(米国6位)、D・ドーン両選手が来日し、東京ローンテニス倶楽部で日米国際庭球試合が行われた	米国遠征から帰国していた熊谷が対戦した
1917	大正6	11月頃、マニラの東洋選手権大会からの帰途、米国のG・チャーチ(米国3位)、H・スロウモートン両選手が来日し、東京ローンテニス倶楽部でプレーを披露した	日本チームは熊谷、松原誠吾、三神八四郎、野村祐一。熊谷がシングルスおよび三神と組んだダブルスで優勝した
1921	大正10	5月、日本で初めての国際競技会となる第3回東洋選手権競技大会が、芝浦で開催された。テニス種目にはフィリピン(ファルガス、ポロニアス、スアレス)、中国(潘文煥、何信道)、日本が参加し、大会終了後に日比庭球戦が行われた	3月、仮発足した日本庭球協会が米国テニス協会(テニ保持国=テニ委員会)へテニ杯参加を申し込む。8月、初参加の日本チーム(熊谷、清水善道、柏尾誠一郎)はチャレンジラウンドへ躍進した
1922	大正11	2月、米国デ杯選手のワトソン・ウォッシュバーンとサムエル・ハーディーが来日し、東京ローンテニス倶楽部で観審試合を行った	東京高師(太田、古賀、白藤)、東京帝大(深谷、木島、大井)、東京帝大(松田、高橋、平田)、慶大(原田、須田、小田切)、明大(横山、深井、鳥居)、早大(安部、川妻、舘川)、関学(吉田、渡邊、小林)、神戸高商(鳥羽、真田、和田)が対戦した
1923	大正12	5月、第6回東洋選手権が、大阪で開催された。築港コートで行われたテニス種目には、フィリピン(アラゴン兄弟、マニユエル)、中国(呉仕光、刀慶毅、董榮翰)、日本が参加した。オープン競技として女子テニスも加わり、フィリピン(サントス、カリガ)、中国(黄麗華、葉生翠)、日本が参加した	日本チーム(鳥羽貞三、原田武一、羽田武内)が優勝した。女子チーム(金田咲子、戸田定代、田村高美子/梶川久子)は、シングルスで金田、ダブルスで田村/梶川組が優勝
1925	大正14	7月、商用の途次に来日中のA・ゴア(ウィンブルドン優勝3回)が、東京ローンテニス倶楽部で熊谷と手合せした	大阪(浜寺コート)、名古屋(七本松コート)、東京(新宿御苑コート、大森コート)などで、熊谷、三木龍喜、安部民雄、舘川卓、吉田嘉壽男、小林了二、太田芳郎、青木若雄らと対戦。新宿御苑では摂政宮殿下の台覧試合が行われた
1926	大正15	4月、大阪毎日新聞社の招待により米国のH・キンゼイ(兄、米国6位)とR・キンゼイ(弟)、H・スノドグラス夫妻が来日し、各地で模範試合を開催した	5月、日本庭球協会の招きで、フィリピンのデ杯チーム(アラゴン兄弟、パレド)が米国へ向かう途次に来日し、各地で日比対抗戦を開催した
1927	昭和2	9月、ハワイ選手権保持者の森分徳子(米国在住)が来日して関東、関西でプレーし、全日本選手権にも出場して優勝した。(結婚して中野夫人となった1935年にも来日し、全日本で優勝)	10月、大阪毎日新聞社の招待により米国のリチャーズ(元デ杯代表のプロ選手)が来日し、各地で模範試合を開催した
1928	昭和3	10月、大阪毎日新聞社の招待により米国のリチャーズ(元デ杯代表のプロ選手)が来日し、各地で模範試合を開催した	4月、日本庭球協会の招きで、中国デ杯チーム(林宝華、江道章)が米国に向かう途次に来日し、関東、関西で歓迎試合が開催された
1929	昭和4	10月、日本庭球協会の招待により、テニ保持国フランスのアンリ・コシエ(世界1位)、ジャック・ブルニオン、ピエール・ランドリー、レイモンド・ロデルの4選手が来日し、関東、名古屋、関西で対戦、交流した	関東(三年町特設コート、台臨試合)、名古屋(名古屋ローンテニス倶楽部七本松コート)、関西(甲子園新設スタンド付コート)で、熊谷、清水、福田、原田(武)、そして青木、鴨打、山岸、志村、佐藤(次)、原田(直)、牧野、羽田、布井、佐藤(敏)、秋元、川地、藤倉(太)、矢崎、伊藤、上原が対戦した
1930	昭和5	5月、第9回東洋選手権大会が、東京で開催された。三年町特設コートで行われたテニス種目には、フィリピン(F・アラゴン、インゴヨ)、中国(林宝華、邱飛海)が参加した。オープン競技として行われた女子の部でも、フィリピン(インゴヨ、カレアガ)、中国(李杏花、李牡丹)、日本が参加した	日本(佐藤次郎、布井良助、山岸成一、志村彦七、川地美、鴨打秀勝)が団体優勝した。オープン競技女子の部も日本(小林知子、滝口滯子、朝吹磯子、飯村敏子)が優勝した
1931	昭和6	6月、慶応大学庭球部の招待で、カリフォルニア大学チーム(ブレード、ラドロー、ギャラウエー、ナイデンら10名)が来日した	6月、アンドリュース(ニュージーランドのデ杯選手)、ダーフ(カナダのデ杯選手)が来日し、東京と大阪で歓迎試合が行われた
1933	昭和8	11月、日本庭球協会の招きで、米国の女子選手ヘレン・ウィルズ・ムーディー夫人(世界1位)がフィリピンへの往復途次に来日し、日本庭球協会の歓迎試合が早大コート、東京ローンテニス倶楽部、甲子園ローンテニス倶楽部などで行われた	男子選手とともに、女子選手(小林知子、林美善子、岡田早苗、南、戸田定代、滝口滯子、富川、増田登志江ら)と交流した
1934	昭和9	7月、日本庭球協会の招きで、フィリピンのL・ガバリア、L・ポリンタン両選手がテニス修行のため来日した	11月、日本庭球協会の招きで、英国の女子選手ドロシー・E・ラウンド(世界3位)、メリー・ヒーラーが米国、中村ら太平洋経由での帰途に来日し、東京大森コート並びに甲子園コートで歓迎エキシビジョンマッチが行われた ※ラウンドは翌1934年にウィンブルドンのシングルスおよび三木龍喜と組んだ混合ダブルスで優勝。1937年にもシングルス優勝している
1939	昭和10	5月、日本庭球協会の招きで、豪州の女子選手アリソン・ハッタースレイが来日し、大森コートでエキシビジョン試合が行われた	3月、中国のデ杯選手許承基、鄭兆佳、監督カーソン氏が来日し、大阪、東京で歓迎試合が行われた
1935	昭和10	3月、中国のデ杯選手許承基、鄭兆佳、監督カーソン氏が来日し、大阪、東京で歓迎試合が行われた	11月、日本庭球協会の招きで、チェコのデ杯選手ロデリク・メンツェルとラディスラフ・ヘビトが来日し、第14回全日本選手権(甲子園)にも参加した
1936	昭和11	10月、読売新聞社の招待により、世界的名選手ビル・テルデン、エルスワース・バインズ、および女子選手ジェーン・シヤープのプロテニス一行が来日し、新設の田園読売球場(田園倶楽部スタジアム付コート、のちの田園コロシアム)、および甲子園コート、名古屋七本松コートでエキシビジョンマッチが行われた (1936年11月、日独防共協定調印)	慶大、関東連合軍、早大、神商大などが対戦した
1937	昭和12	10月、日本庭球協会の招待で、ドイツのゴットフリート・フォン・クラム(世界2位)、ヘンナー・ヘンケル(世界3位)、女子選手マリー・L・ホルン(世界8位)、そしてクラインシュロット監督が来日し、新設になった甲子園国際庭球倶楽部センターコート、名古屋、田園倶楽部コート、そして福岡春日原コートで日独交歓対抗戦が行われた	男子選手とともに、女子選手(岡田、林、滝口、木全豊子、戸田、富川、中村ら)と交流した
1938	昭和13	11月、ユーゴのデ杯選手クエビッチ夫妻、ムペーが来日し、歓迎試合が行われた	11月、初めての1会場全種目開催となる第18回全日本選手権大会(甲子園)に出場したドイツ選手は、男女シングルスとダブルス、およびミックスの五種目に優勝した
1939	昭和14	11月、ユーゴのデ杯選手クエビッチ夫妻、ムペーが来日し、歓迎試合が行われた	11月、米国のアンダーソン、ロバートソン、ハリス、マクニールが来日し、甲子園国際庭球倶楽部で、日本選手と対戦した
1940	昭和15	5月、フィリピンのF・アンボン、A・サンテスが渡米の途次に来日し、田園テニス倶楽部で歓迎試合が行われた	高橋、平井、倉光、山岸、村上保男/村上麗蔵、布井/山岸が対戦した
1940	昭和15	7月、日本庭球協会の招きで、タイ国スポーツ使節としてカスオム、ムーアングランク、サノホ、サンガアンが来日し、大阪、東京で歓迎試合が行われた	11月、日本庭球協会の招きで、ユーゴのデ杯選手フランコ・パンチェツツ、フランコ・クエビッチが来日し、参加した第18回全日本男子選手権大会(甲子園)で単複に優勝した
1940	昭和15	6月、東亞競技大会に参加するため、フィリピンのF・アンボン、A・サンテス、C・カルモナ、デイ(監督業務)が来日し、東京大会(田園コート)で優勝した。 ※関西大会は雨天中止	東京大会での日本チームは、中野文照、鶴田安雄
1940	昭和15	10月、自独伊三国同盟条約締結を記念して、日本庭球協会の招きで、ドイツのブルク監督、H・ヘンケル、K・ギースが来日し、日独対抗試合が東京田園コート、関西甲子園コート、名古屋七本松コートで行われた (イタリアチームはヨーロッパでの戦況拡大のため来日中止となる)	翌1941年6月、遠征選手一行(三木監督、藤倉五郎、隈久次郎)が神戸出帆したが、23日の独ソ独戦のためドイツ行きは中止となり、満州、朝鮮をまわって帰国した
1940年～1945年、第二次世界大戦のためテニ中断 1950年7月、国際ローンテニス連盟総会で、日本、ドイツの除名が解除され、両国は翌1951年にテニ復帰した			
1951	昭和26	10月、日本庭球協会/朝日新聞社の招待で、米国のデ杯選手アーサー・ラーセンと全米ジュニア・チャンピオン名のハミルトン・リチャードソンが来日し、戦後日本初めの本格的な国際試合となる日米庭球大会が東京、名古屋、大阪、福岡で行われた	日米庭球大会の開催地・日程・コート:東京(10/17-18、10/27-28、田園)、名古屋(10/19、栄町)、大阪(10/20-21、扇町ブル特設コート)、福岡(10/24、東公園)
1952	昭和27	11月、第26回全日本男子選手権大会(名古屋栄町コート)に参加したラーセンはシングルス決勝で隈久次郎に敗れたが、隈久と組んだダブルスで優勝した	日本側では、隈久、中野、藤倉、加茂礼仁/加茂公成、堀越善雄/清水彌次郎らが対戦した
1953	昭和28	10月、第27回全日本男子選手権大会(中モズ)に、アイルランドのデ杯選手マーフィ(GHQ.Tokyo)、米国のスタイナー、アンダーソンが参加した	シングルス優勝は隈久次郎、ダブルス優勝は中野文照/隈久次郎
1953	昭和28	7月、フィリピンよりジュニア選手のホセ・エリザルデ、ドンゴ、タロー、カルモナ監督が来日し、日比親善試合(パレスコート)で行われ、引続き全国高校選手権大会(中モズコート)にも出場した	
1954	昭和29	9月、豪州のローズ、ウィルダースピンが来日し、日豪庭球大会が東京(田園コート)、大阪(朝コート)、名古屋(栄コート)、そして選別試合(田園)が行われた	大会開催地・日程・コート:東京(9/25-26、10/16-17、田園)、大阪(9/29-30、府立体育館)、福岡(10/3、東公園庭球場)、名古屋(10/3、栄町コート)、札幌(10/9、スポーツセンター)、横浜(10/11、フライアジム)、仙台(10/13、宮城庭球場)
1954	昭和29	9月、読売新聞社の招待で、ジャック・クレマー(米国)、パンチョ・ゴンザレス(メキシコ)、フランシスコ・パンチョ・セグラ(エクアドル)、フランク・セッジマン(豪)のプロテニス一行が来日し、「世界庭球選手権大会」が東京、大阪、福岡、名古屋、札幌、横浜、仙台で行われた	また、10月1日には中モズコートで関西若手陣(松岡、小林、柴田、石黒、高石、中村)、15日には皇居内パレスコートで関東学生選手(宮城、加茂公成、高山、吉村、岡留、芥川、伊藤、村上、杉村、宇田川、中野、大地、橋本、森、佐藤、印東、向井、西郷、桜井、二宮)がプロ4選手のコーチを受けている